

ミツバチが減少しているのはなぜか？！

3月ぐらいからマスコミを賑わしている話題のひとつに、ミツバチの蜂群の不足があります。果樹園やハウスでの花粉媒介に影響が出ているようです。蜂群不足の原因としては、①寄生ダニ、②種々の伝染病、③ハチノスツツリガの被害、④遺伝子組み換え作物、⑤電磁波の影響、⑥ネオニコチノイド系の新農薬、⑦これらの複合被害など、さまざまな意見が飛び交っています。①～③は昔からあったことなので、最近の急な動きとかならずしも連動しません。④～⑥は近年増えてきたものですが、④と⑤は因果関係がほとんど不明です。しかし、⑥はここ数年急に使われだしたもので、斑点米をつくるカメムシ類に効果があると言われていました。

しかも、この新農薬は、昆虫類の神経伝達機構に悪影響を及ぼすのに、脊椎動物ではほとんど影響がないと言われていて、「夢の農薬」として広範囲な使用が推奨されています。しかし、人に直接の害がないからといって「夢の」という形容詞を被せるのは早計です。

昆虫は体のつくりが大きくならない構造なので、より大きくなる特徴をもつ脊椎動物の餌にならざるをえず、生態的ピラミッドの位置は、最下層の植物のすぐ上、虫食小動物のすぐ下ということになります(挿図参照)。すなわち、植物とともに生態的ピラミッドの底辺を支える重要な位置といえます。



こうした生態的に重要なポジションをもっている昆虫を、「害虫」およびその一味ということで、一網打尽、「夢の農薬」で根絶やしにしたら、生態的ピラミッドは底辺から崩れていくことになります。

蜂群崩壊症候群(colony collapse disorder、略してCCD)は2006年秋からアメリカで広範囲に起こっており、なかなか原因がつかめず、大問題になっていますが、それがついに日本にも上陸したということでしょうか。

ネオニコチノイド系の新農薬はミツバチが察知できる匂いがなく、神経伝達機構が犯されると、帰巣できなくなります。毎日1/3程度の外勤蜂が収穫に出かけていきますが、それがすべて戻らなくなれば、たちまち群の働き手は激減します。昨年8月に、私が飼っていた約1万5千匹の蜂群が二週間後に200匹ほどになり、はからずもCCDを体験しました。

農薬にからむ情報は巨大な利権が伴うため、正確な情報は出回りません。そして、ミツバチは受粉で活躍するため、その減少は目に付きやすいのですが、大多数の昆虫は害虫でも益虫でもないの、絶滅してもまったく問題視されません。今注目されているミツバチ群の減少は「奥の深い恐怖」につながる警告に思えてきます。

大谷 剛(自然・環境マネジメント研究部)

六甲山のキノコ展を終えて

まさかキノコの展示会を担当するとは。私の専門分野は、川や湿地の水生物。どうして、キノコ展をやることになったのでしょうか。私は、水生物とは別に、もう一つの研究テーマがあります。それは、標本をよりリアルで手軽に見せる方法の開発です。博物館の標本でも、美しい虫、大きな化石、獣の剥製は良いのですが、萎びた植物や小さい虫、出来の悪いレプリカだったり。この状況を改善するため、「人体展」などで有名なプラスティネーション技法や樹脂封入の手法を手軽に実現する方法を開発しています。そんなあるとき、某博物館から、キノコの標本作製を依頼されて、試作してみました。とてもリアルにできたので標本加工して返却すると、展示して下りました。すると、来館者や愛好家の皆さん方の中で妙に盛り上がったようで、その噂が発端となって、今回の展示に繋がった訳です。



今回の主役、県立御影高等学校のキノコチーム



製作した標本を使って「演示」する高校生

キノコ展を見た来館者の反応は、とてもユニークで、「色んなきのこがあるね」と普通に通り過ぎる人と、「何でキノコ標本が生々しいのか、一体何だ?」の大きく2つに分かれます。しかも、高校生の作品で、約80種類あるも

のだから、足をとめてじっくり説明パネルを見て頂いた印象があります(いつもはパネルを見ない人が多いのですが)。

今回のキノコ展が上手くいった点は、御影高校、兵庫きのこ研究会、当館の3者による共同事業だったことです。キノコの専門知識、標本作成の技術、探索する目と作業する手の多さがマッチングしたわけです。そして、展示を行ったことで、さらに繋がりが膨らみました。いくつかの市民団体、博物館から標本作製講座や出張展示の打診、キノコ標本等の寄贈話が舞い込んだりと盛況です。高校生にはキノコ研究会に入会希望する人も。ちょっと非日常的で、専門的な魅力あるコンテンツこそが、繋がりを生み出します。よく考えれば、当たり前ですが、今回の展示を通じて改めて気付かされました。リアルなウミウシ、クモの網標本、触れるウンチや魚の標本など、魅せる技法の開発も



六甲山のキノコ展の様子



展示物の写真(ニセマツカサシメジ)

博物館の研究です。魅せる技法を生み出す新しい博物館学、皆さんからの助けを借りて、あるときは一緒に頑張って発展させて行ければと思います。

三橋弘宗(自然・環境マネジメント研究部)

あの人に会いたい

～初夏の鳴く虫巡回展「ぎっちゃん君」の名づけ親

宮武美恵子さん (65歳・三田市在住)



企画展「初夏の鳴く虫と巡回展 んちゃん君参上!」のキャラクターぎっちゃん君の名前は、誰が考えたのでしょうか?そんな気になるあの人に会いに行きました。ある日の忘年会で割りばしの袋に書かれた名前「ぎっちゃん君」が、企画展担当の大谷先生と八木先生に採用されました。命名したのは、宮武美恵子さん。「ぎっちゃん君」「ぎーすちゃん」と鳴くキリギリスの鳴き声から思いついたそうです。宮武さんは、大谷先生のセミナー今年で10回目になる「初級鳴く虫インストラクター」の4期生。1～3期の募集の時は、勇気がなくて申し込めなかったのですが、4期目(4年目)の募集に思い切って一人で参加。「講座が終了したら、今まで気づかなかった鳴き声が急に聞こえるようになったんです。」大谷先生は当時を振り返り「宮武さんは、分かんない、分かんないと言いつつ、のめり込んでいた。」と話しています。「直翅目(バッタ目)は人気がないので、鳴く虫一コオロギやキリギリスの鳴き声を聞いて“おもしろいな”と興味をもってもらえたら。」と話す宮武さんの目は、若々しく好奇心にあふれ、輝いていました!次回も、そんな素敵な人に会いに行きたいと思います。



小林美樹(生涯学習課)

ありまふじフェスティバルレポート



毎年春と秋に恒例の“ありまふじフェスティバル”。今年の春も5月の連休中に開催され、ひとくキャラバンも参加させていただきました。生き物観察会や6月に行われる「初夏の鳴

く虫と巡回展

ぎっちゃん君参上!」の予告展示、ひとく博士の登場など、内容は盛りだくさん!また、4月からひとくに仲間入りした新人職員もキャラバンに参加して、チラシやセミナーガイドをお渡ししたり、出し物をするなど、フェスティバルに来られた方々とのふれあいを楽しみました。一人でも多くの人にひとくのことを知ってもらいたい、そんな気持ちで私もチラシ配りや出し物に参加しました。あいにく天気は曇り空でしたが、午前中から多くの家族連れが訪れ、5月4日の魚の観察会は、急きよ第2弾が実施されるほどの大盛り上がり!網を持って楽しそうに池に向かう子どもたちが微笑ましかったです。今後も、博物館が愛される存在であり続けるために、ひとくの魅力をたくさんの方に伝えていけるよう職員一丸となって努めていきたいと思っています。

上田萌子(自然・環境マネジメント研究部)

進化を続ける丹波の恐竜化石展示コーナー



子どもに人気の恐竜骨パズル

ひとく3階に「丹波の恐竜化石」コーナーがあります。これは常設展示の中にありますが、その展示は進化していきます。春には「丹波の恐竜を知ろうー3年間の発掘報告ー」というテーマの展示に加えて、新たに恐竜について体感したり楽しんだりできる展示が増えました。



発掘の服装で記念写真

たとえば発掘現場写真の前で調査用の衣装を身につけて記念写真を撮る気分になります。また、フロアスタッフのイベントでは、「恐竜骨パズル」が登場し、子どもたちの人気を集めています。さて、夏休みには現在展示してある産状レプリカや化石の一部が千葉の幕張メッセで開催される「恐竜2009 砂漠の軌跡!!」に出張します。その間、展示物が少なくなるのは残念ですが、楽しいイベントなどをさらに充実させる予定です。そして、秋にはさらにパワーアップした「竜と獣の道」が始まります。これから恐竜展示から目が離せません。

先山 徹(自然・環境評価研究部)

新入館員紹介コーナー



次長:森 正明
「少し年配の新人です。是非ひとくで〇〇博士に!」



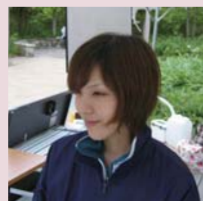
総務課:梶本 悦子
「ひとくを楽しみながら頑張ります!」



研究員:武田 重昭
「“おそと”の自然で楽しく過ごしましょう!」



生涯学習課:西岡 敬三
「ひとくにお越しください!お待ちしております!」



総務課:花輪 美鶴
「よろしくお願いします(*^v^*)」



研究員:上田 萌子
「皆さんとの出会いを楽しみにしています!」



情報管理課:八尾 滋樹
「丹波から来ました。よろしくお祈りします。」



研究員:太田 英利
「研究と成果還元の両立に向けて頑張ります!」



研究員:北村 俊平
「熱帯から温帯まで、対象は幅広く!」